聖霊降臨後第１５主日（特定１８）　「燃える炭火を積む」と「同調圧力」　　２０２３．９．１０．

今日の聖書の箇所は、どれも隣人との関わりとか警告や忠告をする場合、諦めないでいろいろ工夫して関わり続けることを勧めている聖書が選ばれています。いつもは、括弧のついた箇所は省略することが多いのですが、今日は旧約聖書も３３章の１節から６節の部分も読んでいただきました。

エゼキエル書３３章は、「見張りの務め」という見出しがついている有名な箇所です。
今から５６年前、日本基督教団という日本で一番大きなプロテスタント教派の総会議長鈴木正久という牧師さんが、「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」というのを出して、私も神学校の授業でそれを学んだことがありました。その中に、『見張りの使命』という表現が出てきました。

『「世の光」「地の塩」である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国の歩みに対し正しい判断をなすべきでありました。しかるにわたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかって声明いたしました。
まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります。』

国の権力が圧倒的に強い時、それにひるんで、「戦争反対」という警告の角笛を鳴らさないで、逆に戦争を是認、支持して、勝利のために祈っていたことを、自分たちの見張りの役割の放棄と考えたのです。

見張りという仕事は、敵が攻めて来るのを監視して、人々が命を落とさないように警告する務めがあるのです。それを実行しても敵の勢力が大きくて、犠牲者が出るのは仕方ないが、「どうせ警告したって、無駄だろうと思って、警告しないなら、犠牲者の血の責任は、警告しなかった見張りにあるんだ。」とエゼキエル書は言っているのです。

相手が聞き入れようと、聞き入れまいと、見張りはその危険を伝えなければ、その務め、使命を放棄したことになり、神様に責任を問われるのだ、という教えです。

このエゼキエル書３３章の終わりには、みんなが見張りの警告を聞かなかったとしても、その危険なことが起った時には、『彼らは自分たちの中に預言者がいたことを知るようになる。』という、殺し文句のような言葉が出てきます。それくらい、見張りはつらい仕事だけれど、のちにあなたの働きは、みんなに気づかれるだろう、と言っているのです。教会が、政府や権力に対して、空しいように見える活動でも、その主張をやめないのは、このような使命が、エゼキエル書を通して与えられているからです。

しかし、今日私が最初に話したいことは、「敵にも親切にしなさい、」という事です。
今日の使徒書は、「キリスト教的生活の規範」という見出しのついている、私たちは愛し合うのであって、「呪って復讐するんじゃない。」と言っています。

それらをまとめたのが、ローマの信徒への手紙第１２章２０節の言葉でしょう。

『あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渇いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。』

敵に親切にすれば、相手にどんなことが起こる、というのでしょうか。

戦国時代に、ライバルだった、武田信玄と上杉謙信の話を皆さんはご存知でしょう。武田信玄は、甲斐の国、現在の山梨県から長野県に勢力を伸ばしていました。一方、上杉謙信は、越後の国、現在の新潟県の領地を守っていた人です。彼らは、川中島の戦いで、５回も戦争をして、決着がつかなかった、戦国大名たちです。

1567 年武田信玄は駿河、今の静岡県の今川氏との同盟を破棄し、東海方面への進出を企てますが、それに怒った今川氏は東隣の北条氏と協力し、武田領内への「塩止め」を行いました。武田の領地は甲斐・信濃（現在の山梨・長野）で、海に面していなかったため塩を取ることが出来ず領民は苦しみました。

この事態を見て、武田の領民の苦しみを見過ごすことが出来なかったのが、信玄の好敵手上杉謙信でした。義を重んじる謙信は、越後から信濃へ塩を送り、武田氏とその領民を助けたそうです。このことから、敵対関係にある相手でも、相手が苦しい立場にあるときには助けてあげることを「敵に塩を送る」というようになりました。

そして、この「塩を送られる」という経験の後、武田信玄は、もう上杉謙信とは戦うことがなかった、ということです。

武田信玄は、「自分の領土を広げたい」と思って、周囲の大名と戦を繰り返しましたが、そのために領民が苦しんでいるのを、こともあろうに、敵である上杉謙信に救われて、野望を抱いて、その結果領民を苦しめている事実、そしてそれを敵に助けてもらう、ということで、自分とは心の広さが違う、上杉謙信の大きさの前に、恥かしい思いになったのでしょう。

「燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」とは、決して、相手の頭を丸焼けにする拷問をして、復讐することではありません。自分の至らなさ、小ささに気付き、恥かしくて、顔が真っ赤になることです。

武田信玄が、敵である上杉謙信から塩を贈られて、自分が領民の生活のことを考えていなかった、と恥ずかしい気持ちになったのは、その典型的な例でしょう。自分が敵意を抱いていたり、快く思わない相手から、思いもよらぬ親切をされることが、このような体験に結びつくということです。

ここで、大切なのは、「敵を愛する」という場合、私たちは、自分が好意を持っている人、親しみを持っている人に親切にするのと同じように、苦手な人、あまり快く思っていない人にも、親切な行動をすることです。これには、好き嫌いを越えた、強い意志が必要になります。

作家の曽野綾子さんが、以前テレビで語っていたことがあります。

『「敵を愛する」というのは、簡単なことではないですが、「好きな人に対して行う行動を、自分の気持ちとは別に、苦手な人、好きになれない人にも、同じような行動をとりなさい。それがキリスト教の言う、アガペー。理性による愛ということだ。」というようなことを言っていました。

私たちが隣人を愛して、警告したり、忠告したりする時、どのような方法を取ったらいいのか、ただ感情のままに行動するのではなく、一度冷静になって、せめて行動は、好きな人に対するのと同じような態度で接すること。それが、相手の頭に燃える炭火を置くことになり、やがて敵意を克服することになるように思うのです。

ただ、このコロナ禍で、私は昨年は山崎雅弘という人の「未完の敗戦」という本に触発されて、この国が、一人一人の国民を粗末に扱う、という全体主義の恐ろしさを学び、年賀状などに書きました。今年になって、また山崎さんが「この国の同調圧力」という本を出して、また私たちの国の問題を指摘していました。我が国に限らず、国の方針に従うようにさせて行く力はどの国にもあるのですが、私たちの国は、外国の人々が、自分で物事を考えて、それは正しいかどうか一人ひとりが判断する。そして間違っている場合には、声を出す、という民主的な考えが強いので、たとえば第二次世界大戦中、ナチスに攻め込まれた時、フランス政府は、この戦争ではフランスは勝てそうにない、と判断したら、玉砕するのではなく、首都のパリを戦場にさせない、という決断をして戦いをやめたのです。

ところが、同じ第二次世界大戦で、日本は１９４４年の秋には敗戦が決定的になったのに、特攻隊などを作って、国民の犠牲者を増やすことになりました。そして最後は広島や長崎に原子爆弾を投下させてしまうまで抵抗してしまったのでした。

国の威信より、一人一人の国民が大切だ、という気持ちがなく、またそれに気づいても声を上げられないような国になってしまった。そしてそれは現在も同じことではないか、と山崎さんは警告するのです。

相手の頭に炭火を積むというのは、大切なことですが、それにもまして、一人一人を愛しておられる神様に従い、みんなの命を守り、相手に罪を犯させない。同胞にも罪を犯させないための努力が必要に思うのです。